

日風堂園

〈高知県立歴史民俗資料館〉

第4号 1992年7月1日

寺田寅彦論文

「麦畑に現われる弧状線模様」について

高知医科大学名誉教授 上田 壽

自然界の縞模様は例として池の表面に出来る氷の模様については、寺田先生の見解をかつて紹介したが、もう一つの例として「麦畑の地面に現われる弧状線模様」と題する研究が科学論文集第六巻に収められている。これは昭和九年に先生が『科学』に発表されたもので、その概要は次の通りである。

「本年四月十五日の午後東京水道水源村山貯水池の南方に当る旧青梅街道脇の麦畑で、珍しい現象を見た。それは麦株が一行に並んでいる畝の両側に、畝を挿んで、黄い土の弧状線が黒い土の表面にいくつも列をなして並んでいるのであった。その弧状線は円弧に近く円弧の中心は麦畑の畝の中線の辺に



寺田寅彦 (1878~1935)

あるように見えた。その生因は、一尺位に延びて曲った麦の葉の先端が土の表面を少しづつ削り取って出来た土の小さい粒を転がすうちに、その弧状線のエンベロープ（包絡線）の上にこれらの土の細粒が整列したものである。細粒は蒸発面が割合広いから、早く乾いて黄色になり、湿った紫黒色の地面の上に弧状線がくっきり眼立って見えたのである。そのため各弧の弦を連ねる線が畝の両側に略等距離に畝と平行して見える。写真もとらずスケッチもしなかったため、正確な形態を紹介することが出来ないのは残念であるが、この様な模様が、その以前に雨が過ぎて、その後相当な風のあったと云う過去の気象状態を記録しているのは興味ある事と思われた。土の湿り加減や風速がどの位が適当なのか、などは好事家の研究材料になるだろうと思つて本誌の読者にお知らせする。」と結んでいる。

この麦畑の地面の弧状線模様に関連して思い出されるのが、新聞紙上で時々話題になる畑の中の麦や田圃の稲などが円形に倒伏する現象である。U

FOの仕業ではないかと、いや、驚かしてやろうと人が棒で薙ぎ倒してできたものだとか、いろいろ云われている。

それらのことについては格別深く考へたり、検討したこともないので、何とも申し上げることはできないが、調べてみると面白そうである。ただ、氣象学的に見れば、麦の弧状線の場合と同様に風が原因ではなからうか。それはごく小型の竜巻の類でアメリカの砂漠ではダストデビル（塵の悪魔）と呼ばれ、しばしば起る。且つてカリフォルニア大学ロスアンゼルス分校（UCLA）の氣象学教室で、エンジンジャー教授が自分で撮影した映画を見せてもらったことがある。砂塵を巻き上げる渦巻の中で風速計を持った学生が右往左往していた。これと同様な現象は、我々身边でもよく見かけるところで、春や夏の暖期にグラウンドや裸地などで、地面が強く熱せられると強い上昇気流が起り渦巻を生じて砂塵を巻き上げながら走る小さいつむじ風で旋風とも呼ばれている。これが麦畑などの上に行くと、下層部の回転気流により麦を一定の向きに円形に倒伏さす可能性はある。もったときちつとした観測か、実験でもしてデータを揃えなければ断定的なことを云うことは出来ないが、一つの考え方の可能性を述べたにとど

める。

池の面での氷の模様や、畑の麦が描く弧状線など自然界が作るいろいろな模様も、何気なく見過されることが多いが、寺田先生は研究対象として取り上げ、問題提供をして次のように述べている。

「これらの現象の多くのものは、現在の物理的科学的領域では、その中できわめて辺鄙な片田舎の一隅に押しやられて、ほとんど顧みる人もいないような種類のものであるが、それだけにまたどうして重要な研究題目とならないとも限らないという可能性を伏蔵しているものである。今までに顧みられなかったわけは単に、今までの古典的精密科学の方法を適用するのに都合がよくないため、平たくいえば歯が立たないために厄介者として敬遠され片すみに捨てられてあったように見受けられる。しかしこれらの問題をかみこなす適当な「歯」すなわち「方法」が見出された暁には、形勢は一変してこれらの「骨董的」な諸現象が新生命を吹き込まれて学界の中心問題として檯舞台に押し出されないと限らない」と。

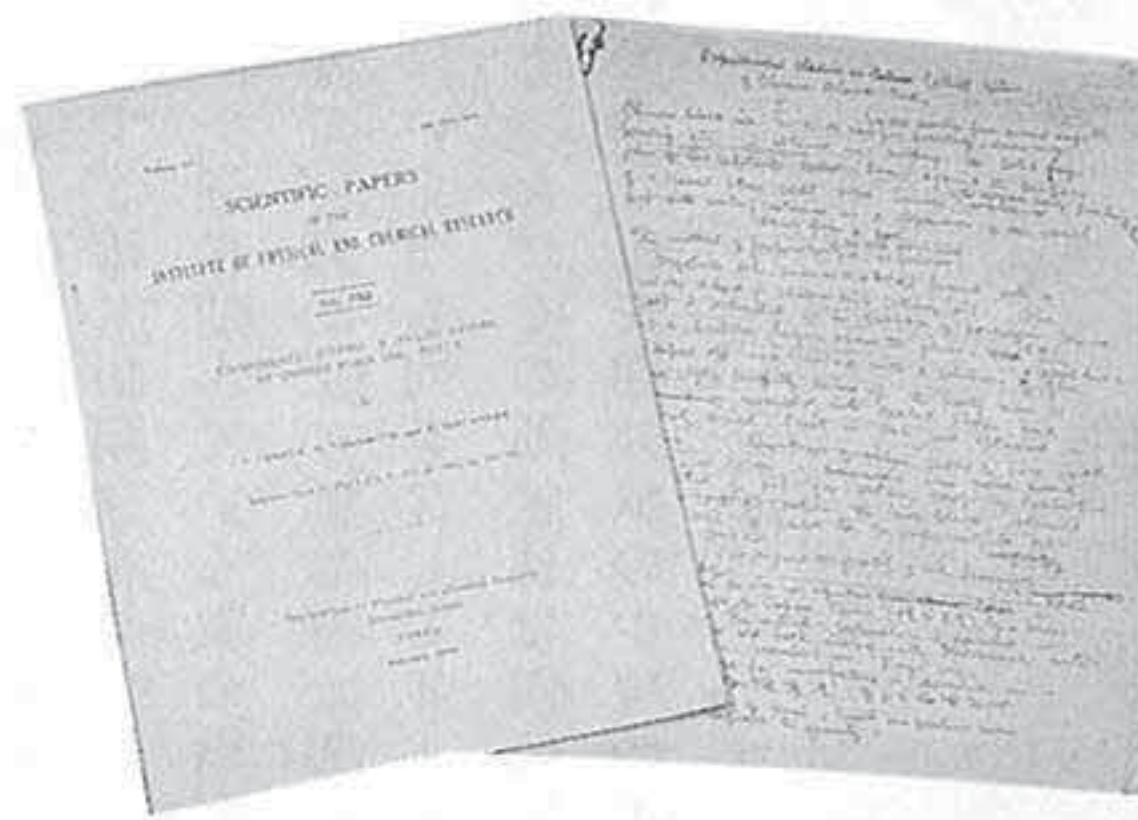
一見つまらない遊びのように見える研究が他の思いがけない重大な現象と結びつくことがあることを暗示しており、寺田先生が特に声を大にして云いたい心の裡であったであろう。

第二回 寺田寅彦展

主な展示予定資料



墨流し (1932年)



墨流しの手書き原稿 (1932年)



愛用の英文タイプ



自画像A (1924年)



関東大震災の火災地図 (1923年)

寄託資料の一部から

高知市寺田寅彦邸跡出土の土師質土器

大川筋の寺田寅彦邸跡は、藩の武家屋敷であったものを寅彦の父利正が熊本鎮台に赴任する前に買いとっていたものと言われる。

利正は、藩政時代の普請方であったため家の設計は得意であったようだ。そのため邸は、増築を重ねている。寅彦の勉強部屋も増築されたものである。寅彦は四歳のときに母、祖母、次姉とともにここに移り住んでいる。寅彦は、明治一四年（一八八一）から明治二九年の熊本の第五高等学校入学までこの家に住んでいた。寅彦邸は、昭和二〇年（一九四五）の第二次世界大戦の空襲で焼失し、勉強部屋を除き灰燼に帰している。

邸跡は、遺族から譲り受けていた寺田寅彦顕彰会が昭和二四年に高知市に寄付し、昭和四二年に邸跡と居室である寅彦の勉強部屋の離れが高知市の史跡に指定された。戦後の都市計画により、邸跡の北方と西方が一部削られ狭くなっている。

昭和四九年には、「寺田寅彦邸を復元する会」が発足し、資金を高知市に寄付し、五二年第一期工事として茶室が

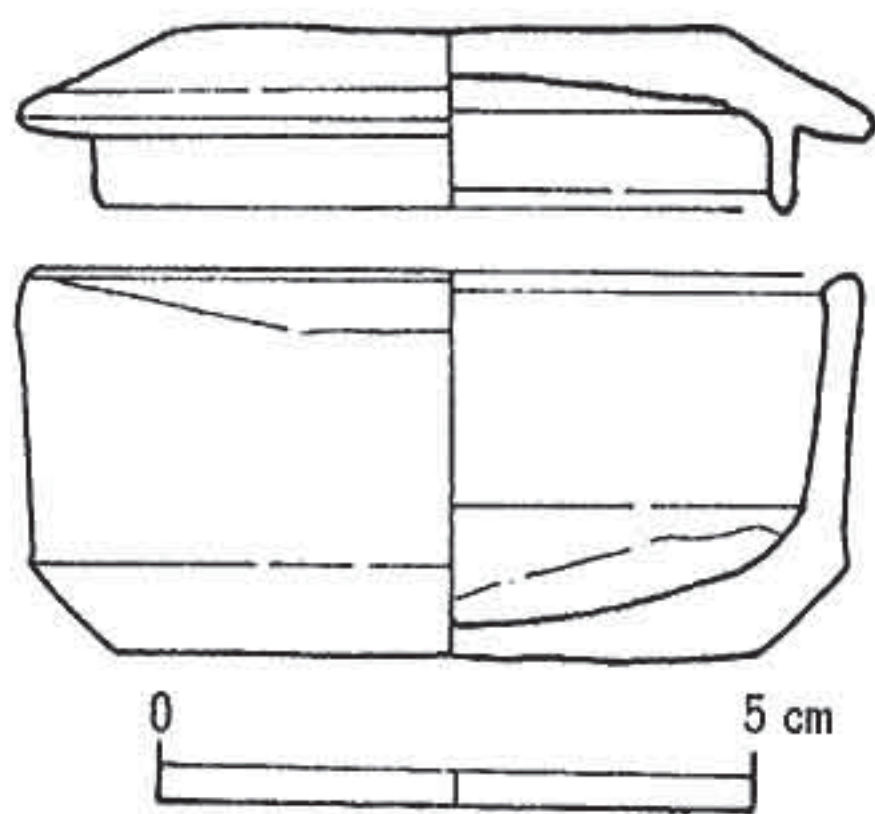
復元された。昭和五九年（一九八四）には母屋が復元され寺田寅彦記念館として公開されている。寺田寅彦邸跡の建物跡の状況を把握するため調査がなされていることは、余り知られていない。調査は昭和五八年に行われ、この時に土師質土器が出土している。

この土師質土器は、寺田利正が作図した寺田家の見取図により出土場所を推定すると寺田寅彦邸跡の土間付近で出土したものと考えられる。他県の出土例よりこの土器も土坑に埋納されていたと思われる。

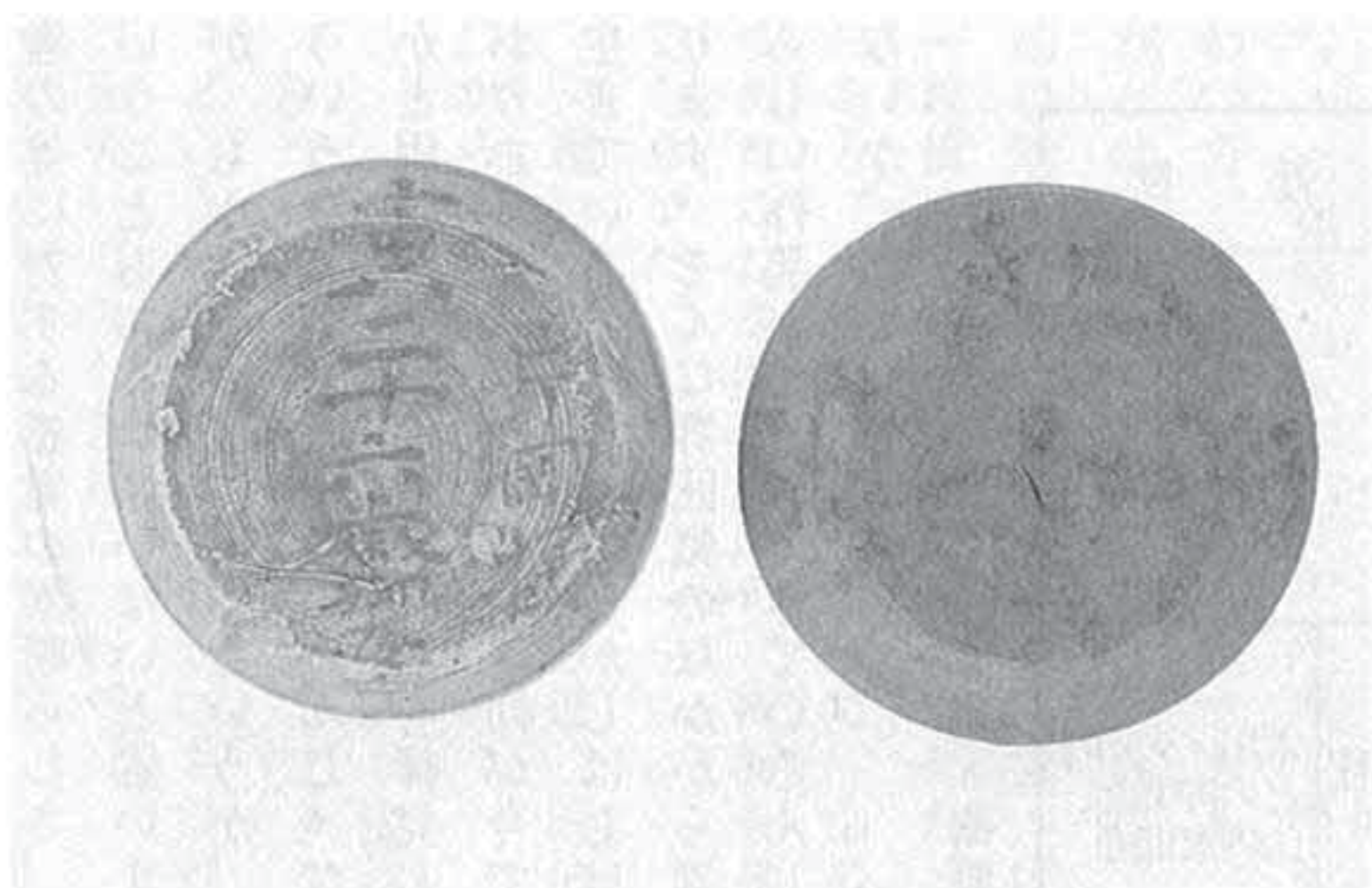
土器は、赤茶色の土師質土器で蓋の大きさは、口径七・二cm、高さ一・五cmである。天井部には回転糸切りが認められ、糸切り後に回転台から離れた時の指跡が認められる。全体に丁寧な撫でが認められる。蓋表には、墨書が認められるが判読できない。身は、直径五・三cm、口径六・四cm、高さ三・二cmである。底部には回転糸切り痕がみられ、体部下端は撫でが認められ、全体に丁寧な作りである。内部には、カーボン状の黒斑が認められ、有機物が入れられていたことがわかる。

底部には「片岡様／寅二十六歳御女中」と墨書されている。寺田家で勤めた女中は多くいるが、この土器に墨書された名前は明確にできなかった。この器は寺田邸になる以前に埋納されたものかもしれない。

寺田邸出土土器の同じ近世・近代の土器は神奈川県池ノ辺遺跡などで胞衣えなを入れた事例として報告されている。この土器も同様の目的で用いられたものと考えられる。（岡本桂典）

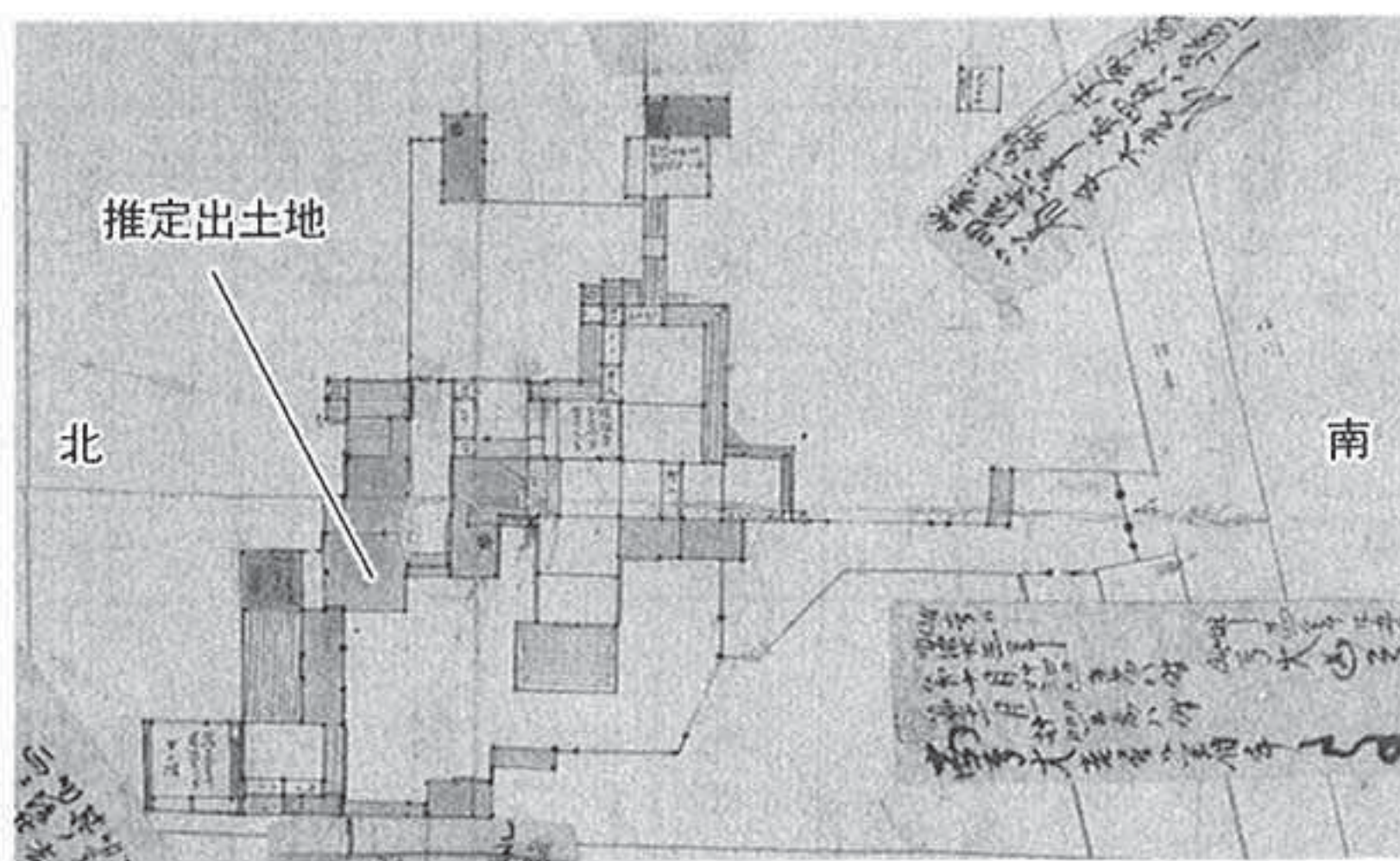


寺田寅彦邸出土土器（高知市蔵）



土器 底部墨書

同蓋墨書



高知市大川筋寺田邸見取図（寺田家蔵）

日本仮面史からみた土佐の仮面

昭和女子大学教授 後藤 淑

本日は、日本の仮面の流れの中で高知県の仮面がどのようなところにあるか、ということを中心にお話しをしたいと思います。

はじめにお断り申し上げておきますと、地方に散在する仮面の研究の歴史はまだ新しい。昭和一七年頃、能の研究で知られる野上豊一郎先生が、能面がどうして出来上がったかを本当に知るには地方の仮面の歴史を知らないとは解明できない、と言われております。野上先生もその時はあまり地方の仮面を見ておられなかった。そこで、そういう仮面にふれてそのようなことを感じられたのです。

ですから、地方の仮面の研究が始まったのはようやく戦後のことでした。この研究はまだ新しく、これからの仕事であるのです。

〔表〕は、日本の仮面の歴史の流れと、土佐の仮面の関わりをまとめたものです。

日本の仮面のなかには、よく研究されている分野と、まだあまり研究が進んでいない分野があります。

よく研究されているのは、古代から

中世にかけての伎楽、舞楽、行道、追儺面と、中世のおわりの能、狂言面です。伎楽、舞楽、行道、追儺面は、日本で生まれたものではなくて、中国大陸からおそらく朝鮮半島を伝って、日本に公的なルートで入ってきた仮面

です。能、狂言面は日本で育てられたものです。いずれも、貴族や武士が支持した芸能に使われたもので、美術的価値が高いものです。高知では、行道面としては、日高村小村神社の菩薩面、能、狂言面としては、山内家の能面があります。

かつて、能、狂言面の原型は伎楽、舞楽面であると考えられていました。しかし両者を結びつけるには、形態上の矛盾や飛躍がありすぎます。そこでそのほかの仮面に目を向けると、土面、民俗面、猿楽面、神楽面があります。いずれもあまり研究が進んでいません。

能、狂言面の原型を知るうえで、中世の猿楽面が注目されます。猿楽は、能、狂言のもとになった芸能です。ですが、猿楽面については資料も少なく、大きなブランクになっていました。高知県には宿毛や物部に古い猿楽面が残

されています。これらの仮面は、日本の仮面の歴史を知るうえで大変参考になります。

高知県に伝わる猿楽面や神楽面を見ていきますと、薙型の目をもつ仮面が多いことに気づきます。日本の各地にも同じ目の仮面はありますが、目を転じて日本をとりまく周辺の民族の仮面を見ると、中国の少数民族や韓国の仮面が同じ薙型の目をしていました。どうやら高知の仮面を考えるには、日本だけでなく日本をとりまく周辺の仮面について考える必要がありそうです。

最後に、地方の仮面の美ということについてお話ししたいと思います。物部村の坂本三好さん所蔵のジジ、ババの面は、非常に面白い造型をしておりまして、作品そのものもよく出来ている。全体的な構成も良く、カンナの使い方なんかまことに丁寧です。仮面の価値というのは、形が無駄なく良く出来ていること、発想が独創的で面白いこと、彩色のバランスといったことによって決まると思うんですけれど、全国の地方の仮面には、ババの面のように、素朴ではあるけれど形と彩色が非常に良いな、と感ずる作品がたくさんあります。

どうして、一体どんな人がこのような作品を生み出して来たのかな、というのを時々考えます。ひとつには作

者の美に対する感覚の素晴らしさ、ということもあるに違いないと思います。もうひとつは、信仰というか、そういう支えが根底にあったんじゃないかと思えます。地方の仮面を拝見しておりますと、古くからの信仰が今でも生きていると感ずることがしばしばあります。そんな雰囲気の中からは素晴らしい作品が生まれてきているんじゃないか、と感ずられます。

(文責・梅野)

〔表〕

| 原始 | | 古代 | | 中世 | | 近世 |
|----|----|-------------|---|------------|---------------------------|-----|
| | 土面 | 民俗面 | | 猿楽面 | 能、狂言面 | 神楽面 |
| | | 伎楽、舞楽、行道、追儺 | | | | |
| | | 西山八幡宮 仮面 | はいたか八王子宮 土佐清水八幡宮 山田の島馬路村熊 沖野神社 物部村神楽面 | 土佐神社 能面 | 本川・大川 などの神楽面、 山内家能面 | |

永祿の姆

吉村 淑甫

その在所を久保の沼井と呼んだ。

韭生川の溪流が細々と山の奥へ遡ってゆく辺りに、ひときわ大きな岩がある。人の背丈の三倍以上はある。岩が流れへ頭を傾けて坐りこんでいるように見える。その岩の手前に坂本三好老人の家がある。あたりに住家は殆んど見当たらない。老人は一日のうちの大方を後背山へ出かけているので、家は菊衛媼がひとりで座敷と釜屋をいつたりきたりして、猫を吐ったり、飯を炊いたり菜を煮たりしている。

坂本家に六面の中世仮面が祀られている。六面中の姆の面の裏に永祿十一年の墨銘がある。他の五面―爺面、炭焼面、女郎面、猿面、天狗面も大凡その頃からのものと思われる。これら仮面は代々坂本家に伝わってきたのとことだが、同家が永祿の昔から其処に住んでいたかどうかは三好老人も知らないそうだ。

永祿十一年といえば、長宗我部元親が盛んに兵を動かしていた頃である。本山氏を滅亡に追いこみ、安芸国虎に鋒先を突きつけ、一方では、五年前本山氏に焼かれた土佐神社を再建したというような年である。

だが、ここで坂本家の仮面が格別に長宗我部氏の盛衰並びに地下の文化に関わっていたという話ではない。しかし当時この奥山に仮面を用いる芸能が存在したということはまぎれもない。

今度、仮面展を開くことになって、若い学究の梅野光興君が精力的に県下を駆け回って仮面を集めた。中世年号のものが幡多郡や香美郡から十面ほども出てきた。

それだけではなく梅野君は仮面劇に関連した自身の説を提示し、土佐の神楽中の「嫁聲とり」のドラマを、中世猿楽の系統として拡大して見せてくれた。慎重な彼は理論化こそしていないが、い



面の姆

わば鄙の手猿楽として郷村生活の中でも、もっとも素朴な環境のなかに遺されていた部分に光を当てた。少なくともわたしにはそのように感じられた。

又、梅野君は、「嫁聲とり」咄とは別に、坂本家の正月三ヶ日に行われていた「ホウメンさまし」の仮面劇をも記

録した。その中で彼はババの面、ジジの面のやりとりを、菊衛媼の話などをぞってこんなふうに伝えている。

「昔からばあはしゃべる、じいは黙っとるといふが、ババの面はいろんなおしゃべりをして、ジイの面は何も云わずに立っているだけであった。ババの面が勝手なことをしゃべるのをジイの面はだまって相手をする。」

ババは娘を三人養うて候
一人の娘は浜へやって候
浜へやった娘が、ババもちつと来いろ
御座れろと言うけん、行ってみたら

鯛の骨の三年も四年もに
なるのをくれて、ババの
歯にはあわん、腹が立っ
て腹が立って、しょんぎ、
しょんぎと戻って候

菊衛媼の語りはさらに
「山へやった娘」田中へ
やった娘」と続くわけで
ある。これら語り口も猿楽滑稽中のも
のと見てもよいのではないだろうか。
梅野君の追究に期待したい。

わたしが坂本家の仮面を見に行きはじめた頃をいえば、もう二十年余の昔になる。以来、四度、五度にわたって同家を訪れている。六面中のとくにわたしは姆面に魅かれていた。
何度目かの折、フランス人のおばあ

さん学者と一緒に行ったことがある。
「わたしはこの面をいちばん好んでいる」

と言うと、彼女は「おや、まあ」という身振りをして
「これ、ニホンの古いお婆さんネ」と言っ
て、しきりに頷いた。西洋人にもわたしの気持が少し伝わったか
なと思うと同時に、一方で妙に面映ゆ
い気もした。

又、一度は夏の暑い盛り、画家の赤坂三好さんを伴った。「七夕天女」(作者著述)の物語りに絵を付けるため、彼が態々遠くからやって来てくれた。炎天の下で画伯は巨岩に這上るユガの状態を観察した。天女の夫になった狛師の小次郎がユガの蔓を伝わって、天へ登って行く譚である。ユガとは夕顔瓜瓢箪のことである。画伯は巨岩を離れる時、ユガの葉っぱを一枚摘んでポケットにしおぼせた。そのあと、老夫婦の家に入って、山の話のあれこれ聞きながら、姆面を見せ
てもらった。

夕暮れ、暇を告げて戻り道、画伯の口から
「ウバガフトコロって言うのは、きつとこんな場所だろうな」とい
う言葉が出た。いかにも自然に口を突いてきた言葉だった。
※ウバガフトコロ 日本各地に見られる場所名

宮地佐一郎編

『中岡慎太郎全集』(勁草書房)

昨年六月、宮地佐一郎氏編『中岡慎太郎全集』が発刊された。本書は、同氏編・平尾道雄氏監修の『坂本龍馬全集』(昭和五二年刊)の姉妹編ともいべきものである。

本書の第一部では、文久元年から慶応三年に至るまでの慎太郎の書翰六一通と日記・漢詩・文書類二八篇が紹介され、第二部には、中岡家の系譜や慎太郎関係書翰七〇余点が網羅されている。編者は、「なるべく書翰前後の史的事実にふれ、全書翰を通読することによって、中岡の全生涯が展望できるように編述した。」と述べられているが、その尽力のおかげで、幕末の様々な局面における慎太郎の意識と行動が、本書の中で鮮やかに甦っている。

また、第三部には、慎太郎に関する参考文献・周辺史料四六篇を採録、巻末には前田年雄・瀬戸鉄男・一坂太郎・西尾秋風各氏の論考を掲載して多彩な慎太郎像を紹介、最後に編者自身の随想を付されている。

宮地氏は、この『中岡慎太郎全集』取材の旅」と題する随想の中で、慎太郎の業績に対して、「歴史資料にわ

け入ってみると、龍馬がやったといわれる薩長同盟や倒幕運動における着眼

と挺身は、むしろ龍馬を超えている。」と高い評価を与えている。また、氏は「歴史を叙述し復元するには、文献的資料ばかりに頼っては行かない。

(中略)文献の博捜は必要であるが、实地踏査、現地取材による資料の蒐集が貴重で、生の歴史に接する手段であることを痛感した。歴史の取材とは人間の取材である。」と主張され、次のような慎太郎論を開陳している。

中岡慎太郎の脱藩後の生き方は、殆ど颯風の眼の中で生きていく。一枚の刀刃の上を渡っている。修羅に包まれて遂にその焰を全身にあびて斃れた。維新を目撃しながら幕末という疾風怒濤に、他の若者がそうであったように、彼も呑みこまれて再び帰り来なかった。

ここに、編者の「人間」中岡慎太郎に対する熱い想いがあふれている。そして、その情熱こそがこの大著を完成させる原動力となったと考えられる。

(下村公彦)

歴史散歩

旧寺田寅彦邸

(寺田寅彦記念館)

〈高知市小津町四〉

高知城の北面、迂り山の三叉路を北へ進み、堀川にそって西に向かうと寺田寅彦が幼い頃過ごした邸宅がある。

寅彦は一八七八(明治一一)年一月二八日、東京で寺田利正、亀夫妻の間に生れた。この邸宅は父利正が明治一三年ごろ購入したもので、四歳から八歳までの幼少時代、そして九歳から一九歳の少年期にここで暮らした。寅彦の一生のうち高知で過ごした年月は短い。台風、土佐の地殻構造など高知に関する科学研究のテーマを選んだり、随筆に高知のことを書き綴ったり、水彩画の題材に高知の風景を描くなど幼いころ高知で過ごした体験が後の彼に影響を与えている。

昭和二〇年の空襲で邸宅のほとんどが焼失してしまったが、勉強部屋だけは焼け残った。その後、邸宅を復元し、現在は高知市の管理で寺田寅彦記念館として一般に公開されている。

邸宅の門前脇に刻みこまれた「天災は忘れたころにやってくる」という言葉は地震や火災を重要な研究テーマと

して取り組んだ、彼らしい言葉であるが、残念ながら、本当に彼がこう言ったという確かな証拠はない。

寺田寅彦は物理学者であるがその他の分野にも才能を遺憾なく発揮している。特に俳諧における造詣は深く、熊本五高時代に英語の教師として赴任していた夏目漱石との出会いが彼をその世界へと導いた。吉村冬彦のペンネームで随筆も書き、自然をよく観察する彼の鋭い感覚が織り込まれていて、科学の世界もそのテーマに取り上げ、易しく紹介している。

音楽も嗜み、記念館には愛用のオルガンが保管されている。(曾我満子)



ニュース

企画展示室から

「仮面の神々―土佐の民俗仮面展―」

開館一周年を記念して、県内の民俗仮面を集めた企画展を開催した。展示した仮面は二四五点。四月二十九日から五月一五日まで一九七点を展示、そのうち三七点を別の五七点と入替えて一六日から三一日までは二一七点を展示した。

仮面は県下各地の神社や個人の家から集まり、鬼や天狗、男や女の顔が来館者を出迎えた。ズラリ並んだ二百の面は、観る人の多くを驚かせたようである。

今回の仮面展は、高知の仮面展としてはこれまでに最大規模のものであり、現在わかっている県内の仮面を通覧す

る内容であった。また大豊町の仮面群など今回はじめて一般公開されるものも多く含んでいた。

字数に限りがあり、また簡略になりがちな解説パネルを補う意味もこめて、二度の講演会とビデオを使った展示解説を行った。仮面研究の第一人者、後藤淑氏の講演は、スライドを多用し、日本の仮面史のなかに土佐の仮面を位置づけるものであった。後藤氏の講演が「外」から土佐の仮面を見る内容であるのに対し、県内で民俗研究を続ける高木啓夫氏の講演は、土佐の仮面の背景を「内」から見るものであった。すなわち、神楽の詞章から仮面に秘められた意味の世界に迫るものであった。両氏の講演によって、企画展が立体的なものになった。ビデオも県内外の二種類を用意し、生きた仮面の姿を紹介した。

期間：平成四年四月二十九日～五月三十一日



企画展示室



開館一周年記念特別講演会

「歴史館日録」

| 月日 | 出来事 |
|--------|--|
| 三月二日 | 徳島文理大学博物館実習 |
| 三月一八日 | 企画展「土佐を掘る第一回」発掘された遺跡展」閉幕 |
| 三月一五日 | 第三回史跡巡り「窪川・銅鐸の里と清流の町、大正の文化財」マルチスライド「海・山のうた |
| 三月二〇日 | 土佐の祭りと民俗芸能」上映開始 |
| 四月二十九日 | 開館一周年記念企画展「仮面の神々 土佐の民俗仮面展」開幕 |
| 五月二日 | 一周年記念特別講演会 後藤淑氏「日本仮面史からみた土佐の仮面」 |
| 五月一六日 | 特別講演会 高木啓夫氏「土佐の神楽面とその周辺」 |
| 五月一七日 | 映像による土佐の仮面展の解説 |
| 五月三十一日 | 企画展関連映画会「仮面の神々 土佐の民俗仮面展」閉幕 |

「れきみんサークル」会員募集

資料館では、館をご利用いただく方々に各種催しの情報等をご提供するための会員を募集しています。

年会費は千円で、会員証を発行し毎年四月に更新します。入会されると、館の企画展や講座、見学会などのご案内と共に、当誌を年四回お届けするほ

か、岡豊山講演内のかや葺き民家を句会等の文化活動に利用できるなどの特典があります。

ご希望の方は、氏名、住所、電話番号、生年月日をご記入のうえ、郵便局発行の定額小為替千円分を同封して郵送して下さい。また館の受付で申しこまれても結構です。くわしくは、館の「れきみんサークル係」あてお問い合わせ下さい。

ユア・ボイス

企画展「仮面の神々」に寄せられたご意見から紹介いたします。

「面の豊穡さが印象に残った。」

「各地に散っているものを一同に集めて鑑賞することが出来ました。」

「高知県にも、こんなに立派なお面がたくさん残っている事を知って良かったです。」

など、好評を博しています。

調査研究の成果を、目に見える形にするのがこうした企画展、或いは出版物などです。

「これからも埋もれた文化を見つけ出して下さい。」

などのご意見をたくさんいただきまし。皆様の熱い期待にこたえるべく、館員一同、息の長い活動を続けてまいります。

〔企画展の案内〕

第二回 寺田寅彦展

— 科学とその周辺 —

平成四年七月十八日(土)〜八月三十日(日)

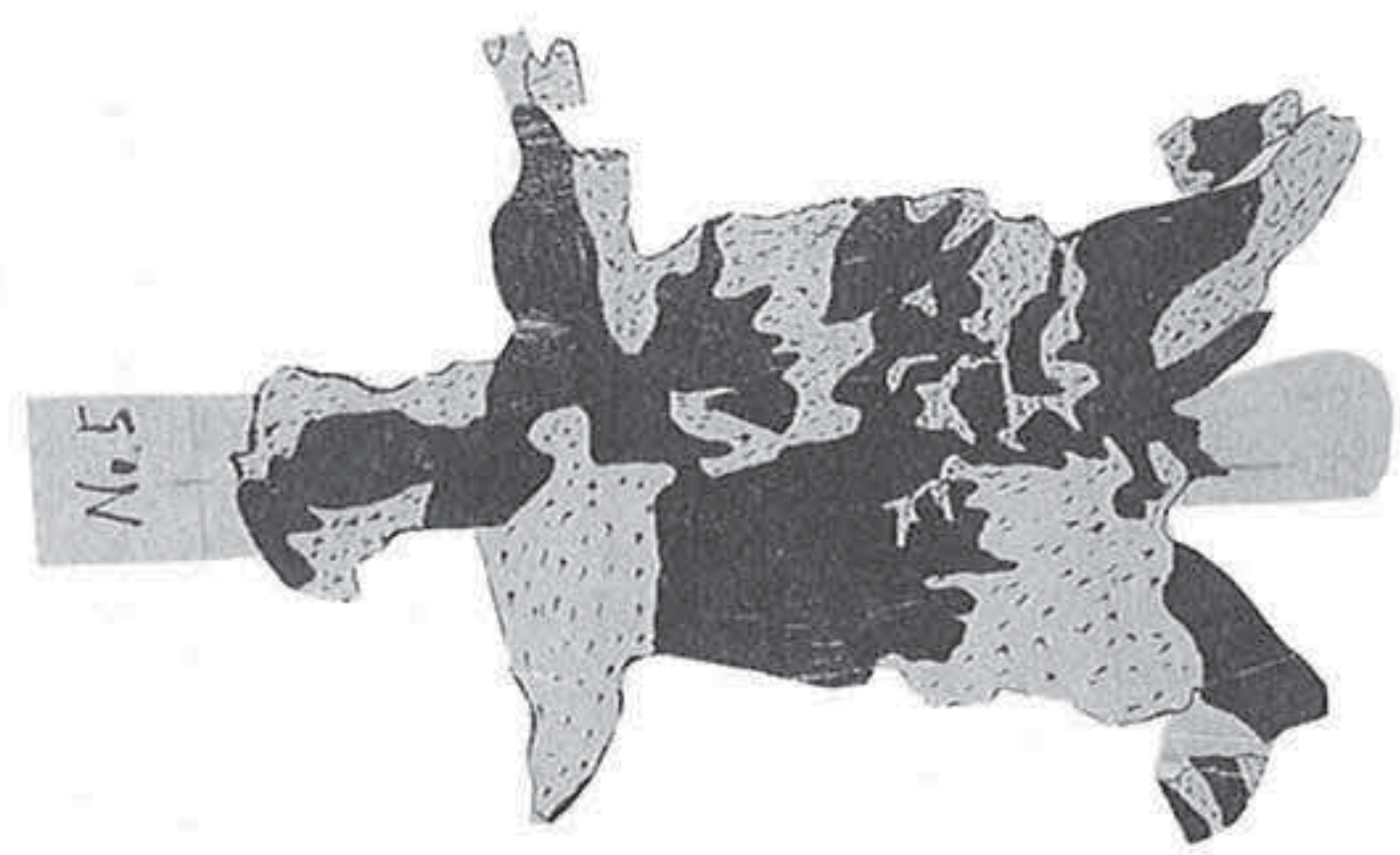
開館記念の第一回寺田寅彦展に続いて第二回寺田寅彦展を予定しています。前回は寅彦の才能の多様性を概観する内容だったのに対し、今回は、科学者寺田寅彦を中心にご紹介します。理学研究所に保管されていたうちで、幸いにも戦災から難を逃れることができた科学論文の手書き原稿や、その実験データ、弟子達の実験レポート、また高知にゆかりの資料や前回すべてがご紹介できなかった夏目漱石からの手紙を公開する予定です。

科学に関する資料は、火災、地這り、自然界の縞模様のテーマを取り上げます。『寺田寅彦随筆集』が広く読まれているのに対し、科学の世界は一般の人には難解ととらえられたのかこれまであまり広く関心と呼んでいませんでしたが、身近なものの事象から研究のヒントを得るなどその導入は平易な事柄から始まっています。寅彦の科学は日常生活のなかから涌いた疑問から法則が発見されてよりおおきな事象に

もあてはめることができるという流れで研究を進めていくことが多かったようです。その姿勢が寺田寅彦らしさといえるのかもしれませんが。

寅彦は弟子たちの実験結果から研究の筋道を立てることも多かったらしく、弟子たちの実験報告、観察報告が師にたいする手紙のなかで詳しく述べられています。そんな資料も大切な研究資料として自分の論文原稿とともに大事に保管していました。そのような温かい師弟関係が手紙の内容から読み取れます。

今回の企画は寺田寅彦の科学の世界をなるべくわかりやすく、皆さんに興味を持っていただけるような展示内容となるよう努めています。



猫の毛の模様

〈利用案内〉

開館時間 午前9時〜午後5時
(入館は、午後4時30分まで)

休館日 毎週月曜日(祝日及び振替休日にあたる場合は火曜日)／12月28日〜1月4日

入館料 一般・400円／中高生・150円／小学生・50円
〔常設展示〕

団体(20人以上) 割引あり
(療育手帳・身体障害者へ1・2級)

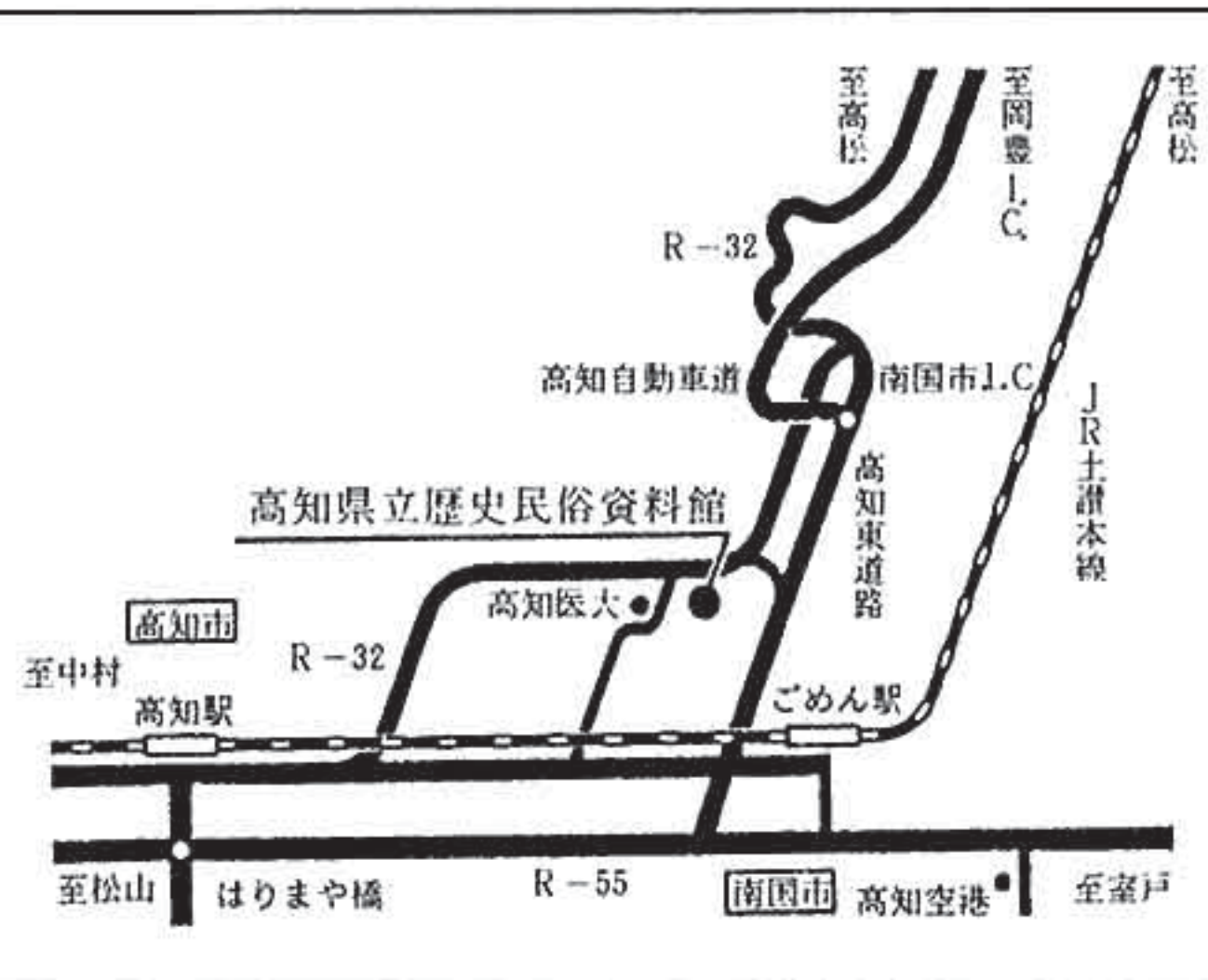
手帳所持者とその介護者へ1名(長寿手帳所持者は無料)

交通機関

高知市中心部から車で約20分。
駐車場(大型バス4台・普通車50台)あり。

〔公共交通〕 船岡南団地発歴史館行き終点下車。
領石・奈路・田井方面行き学校分校(歴史館前)下車。

(徒歩5〜10分で資料館へ)
〔土電〕 新改・白木谷方面行き岡豊橋下車。
(徒歩10〜15分で資料館へ)



〔図録販売中〕

○「仮面の神々―土佐の民俗仮面展―」

展示解説図録 頒価千円送料一冊二六〇円

展示資料を中心とした三五〇点の

仮面の写真に詳細な解説を付す。

○「常設展示案内図録」

頒価千五百円送料一冊二六〇円

オールカラーで、総合展示室と民俗

展示室の代表的な資料を紹介する。

〈ひつひつ〉

史跡巡りの企画や交渉で、各地の隠れた文化遺産の存在を知り、感動をあらたにしています。(梶原)

次回の寺田寅彦展は科学が中心となっています。ここまで来ると自然科学は苦手とばかりは言っておれません。(曾我)

鯨に肉迫しようとしている今頃、シャチに触ってきました。卵のようにスベスベしていましたが、歯並びを見てドキドキ。(中村／旧姓・河野)

平成四年七月一日
編集・発行 高知県立歴史民俗資料館
〒783南国市岡豊町八幡1099-1
TEL 0888-12211
FAX 0888-12110